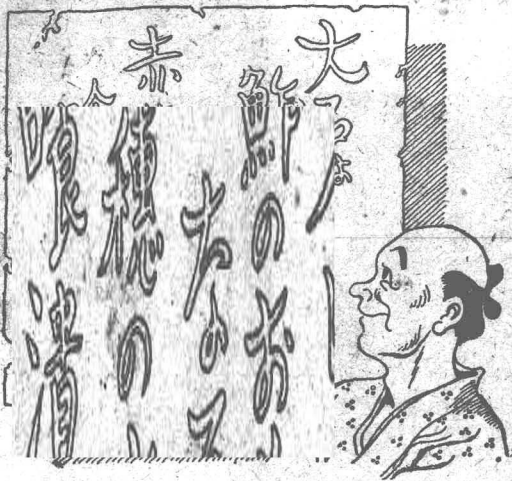


田村梁太郎着

裏返し忠臣藏

(上巻)

裏返忠臣藏



昭和二十四年十月十日 印刷
昭和二十四年十月十五日 發行

定價 金百五拾圓
賣力 金百六拾圓



著者 田村榮太郎

發行者 吉田庄藏

印刷所 典文社土井印刷所

東京都中央區銀座地一ノ六

發行所 潮流社

東京都中央區銀座四ノ四
電話東京(56)三七五五番
振替口座東京五七七番

はじめに

赤穂義士といへば、日本人であれば、誰れでもしつてゐる。誰れでもがしり、偉い人達と敬服してゐるのは、自分達の生命を、君主のためには、捧げてしまふといふことである。この偉い人達のまねをして、自分達も、國王に生命を捧げなければいけな

いと考えるようになるのは自然であるが、自分の尊い生命を、ごみのように捨てる人間が、實際いたであらうか。

尊い自分の生命を、君主のために捧げたと、赤穂浪士の首斬り事件を美化して、國民にたたき込んだのは、浪花節、講談、芝居、小説、童話なのである。浪花節語り、講釋師、役者、作者らは、科學的史學者でないのだから、首斬り事件の真相を知ることができないし、大抵は知りたがりもしない。君主制を支持する軍國主義史學者や理論家が、ねじ曲たものを、それよりも誇張して、傳えるだけであつて、民主々義的良心に上る疑問さえない。

赤穂浪士の浪士とは、失職した軍人である。失職した赤穂浪士、……、もう一度就職

して、國民を搾取し、遊んで生活をする身分になりた。それには、まず人を殺して有名にならなければ、就職ができないところから、吉良を殺したのである。君主に生命を捧げたのではなく、君主を悪用したのである。太平洋戦争を起した軍國主義者どもが、君主のためでなく、自分達の野望のために、戦争を起したことは、周知の通りであるが、それと同じなのが赤穂浪士首斬り事件の真相である。

赤穂浪士の首斬り事件に限るものでないが、至て軍國主義的に、ねじ曲げられた史實の真相を、娯樂を通して、國民諸君に訴え、軍國主義を一掃し、民主々義化する責任は、われわれ科學的史學者にある。そうして彼等に隱退させなければならぬ。

裏返忠臣蔵は、右に述べた國民娯樂を供給する一切の者に對する、民主々義の戦いでもある。もちろん、目的は、國民すべてへの、軍國主義娯樂物にたいする揚棄の願ひである。

昭和二十三年七月

浦野川にて

著

者

目次

はじめに

第一章 お城をめぐつて

小軍國主義者……………(二) 就 職……………(二一)

大 石 関……………(三五)

第二章 殿中又傷うらおもて

赤字の末……………(五四) 即決死刑……………(六六)

籠城戦術……………(七八) 安兵衛遊説……………(一一一)

降伏戦術……………(一一五)

第三章 うきさん御亂行

人肉ふた道……………(一三四) 竹の子……………(一五四)

第四章 知らない連判状

鎮撫班……………(一六八) 分 裂……………(一七九)

第五章 裏返し銘々傳

生きてる十次郎の母……………(二二〇) 十七歳の矢頭右衛門七……………(二三一)
大高源吾と母の貞立……………(二三四) 主税の戀ものがたり……………(二四〇)



第一章 お城をめぐる

小軍國主義者

播磨の赤穂刈屋城主浅野内匠頭長矩の先祖は、豊臣秀吉の五奉行の一人、浅野長政である。五奉行は反徳川家康の一派として五奉行黨を結んでいたが、その一人の石田三成が引退してから、崩れはじめ、朝鮮征伐の軍功恩賞問題では長政は、加藤清正などの六將とともに、反石田派の急先鋒となりこれからは、七將と接近した徳川家康と親しくなつた。

長政の長男を幸長、二男を長晟、三男を長重といつた。幸長の家は、のちの安藝廣島の浅野本家であつて、安藝・備後の二カ國で、四十二萬石の收穫のあるところを領有し、十八國主の一といわれ、松平の稱號も徳川から與えられ、江戸霞が關の朱塗の門とともに有名であつた。

幸長の跡は、次弟の長晟の子の光晟が相續し、末弟の長重は分家した。長重を祖とするのが、長矩の家である。慶長五年といへば、夏には徳川家康は、東の上杉を討ち、秋には西の石田を討つた歳であるが、この歳の春、長重は、家康の命令で、父のところから、江戸にいる家康の子の秀忠のところへ送られ、仕えさせられた。ときに長重は十三歳であつた。同じ六年には、下野の眞岡二萬石の地を彼は徳川から與えられた。同じ七年には、松平家清の娘を家康の養女として、長重の妻に與えられたが、同じ十年には、長重は妻と共に江戸に住むことになつた。

この翌年から、江戸城を築く大工事ははじまり、大名は皆、工事の義務を、徳川から課された。淺野の名家でも、石垣を築くことを命ぜられ、石垣を築いたところ半ばで崩れてしまつた。このため幕府の評判が悪いという風説に驚いた長重は、すでに幸長が歿して淺野本家の全權を握つてゐる長晟の處へ来て、

『兄上、普請奉行に腹を切らせて、公儀に謝罪するのが、當然だと思ひます』
と、激しいつた、兄はしすかに

『いかように、世間で風説を立てたとしても、お前のように、そう深く心配するには及ばない。私が引受けた石垣の町場は、泥が深く、石が据わらない。そこで大木を底に敷き、よう／＼築きはじめたのだ。普請なかばで石垣の崩れることは何も珍らしいことではな』
と答えた。いらだつた長重は

『私の聞いたところでは、公儀の首尾は、すこぶる悪くて、淺野の家の大事になりはしまいか、そうでなくても、加藤・福島と同じに、もと當家は、豊臣家と由緒が深いのですから、徳川家では領地を削るか、没收しようかとの考えばかり。何で、この失策を見逃がすものですか』
と。兄は、また、

『そうか、こんどの御普請は、私の名代に淺野左衛門を命じ、左衛門は普請奉行を入選したのだから、

罪があれば、この長重にある。罪のない普請奉行に腹を切らせて、罪をまぬがれようという責任回避は、私には出来ない。責任を轉嫁し、ただ利益にばかり走るのば、町人だ。四十二萬石に傷をつけたとて、そういう不條理なことは、してならぬ』

といったところ、長重は、顔を赤らめて退席したという。野性の残る外様大名の兄と、譜代化した弟とは、こうも違つた。元祿の吉良邸討入から、九十年ほども前の、昔話である。

これより前、淺野長政は、隠居料として、常陸の眞壁五萬石と近江の愛知川五千石を、徳川から與えられて、隠居していたが慶長十六年に歿したので、三男の采女正長重は、父の遺領を相續した。遺金も相當にあつたらしい。

元和八年の末、幕府は常陸の笠間城主の永井直勝を、下總の古河に移したため、笠間の空城を、長重に與えて、こゝに移すことにした。その時、長重は幕府に

「眞壁は、父の墳墓の地ですから笠間に移りたくありません、御勘辨を願います」

と、請願したところ、幕府は、

「その孝心は、一應はもつともだからその身は笠間にあつて、眞壁を領したらよからう」と請願の一部分をいれた。

「前髪を剪らない頃から勤公を怠らない、謹直な方」

と、譽められた長重は、寛永九年に歿して、内匠頭長直が、父の遺領を相続した。

徳川幕府は、すべての大名に對して、何かの義務を、平常でも課した。戦争のときの軍役と同じである。命ずる役は、時によつて輕重がある。

長直が相続してからは、幕府の課役は、重いものの方が多かつた。江戸城西丸の石垣を築く役、朝鮮の使臣が來たときの館伴役、江戸火消の役、大坂城を守備する加番の役などがこれであつて、藩財政はこのために赤字となるところから、領民の年貢を重くしたり、用金を命じたりして、百姓騒動の種を播いた大名が多い。

幕府では、重い役をつとめた大名で、親しい關係にある者には、機會があれば、いゝ土地に領地を移してやつて、赤字財産を黒字にするように、手加減した。

長直は、慶長十七年に、大坂城の守備をつとめ、正保元年に、また大坂城の守備のために、大坂に行つてゐた。同二年、播磨の赤穂の領主松平輝興が發狂したので、幕府は、その地を沒收して、その子供は、備前の岡山城主の松平新太郎光政に預けた。

赤穂が無領主になつたので、幕府は、

「赤穂は土地のいゝ處だ。常陸では、五萬石の領地であつても、三割位の年貢しかとれなからうが、

赤穂は五割位の年貢はとれるだろう。それに何の役もかゝらない。鹽や漁業などの、高の外の小物成も多い。勝手元の立直しが出来る處だから、内匠頭を移して、休養させよう』

という事になつた。そこで、幕府は、使番の藤田數馬助を大坂にやり、移封の命令を傳えさせた。

このとき、長直は、父長重がいつたような言葉、

『眞壁は、墳墓の地ですから』

とも、また

『笠間は城があるから、城主の格式がありますが、赤穂は無城だから、ただの領主か、城主格となるでしょう、格式が落ちては先祖に對して申し譯がない』

ともいわずに、幕府の命令を拜受した。六月十二日のことである。

大石内藏助良雄の先祖を、内藏助良勝といふ、近江の粟太郡大石中村の者であつて、良雄の頃にもとの屋敷として、縦二町・横廿間が、膳所領地に残つていた。

はじめ良勝は、山城八幡山の宮本坊の弟子となつたが、

『頭を剃つて、墨染の衣を着る坊主はいやだ』

と逃出して、桑名にゆき、それから江戸へゆき、まだ年若い主人の淺野長重を得た。時に、彼も若く

十八歳であつた。長重へ就職の世話をしたのは、甲斐の秋山伯耆守の子の專齋という者だというから流浪した結果の就職であろう。

就職したはじめは二百石の知行、大坂兩度の戦争のときは、五百石の知行にのぼり、毛利の軍の首二つを獲つてからは、主人の信頼もますます厚く、ついに千五百石の知行をえ、家老の最高職についた。

正保から慶安へかけては、軍學研究が盛んになつた。無學の武士も、學問するようになり、まだ戦争もないと、いえないところであつたからだ。甲州流・越後流・楠流の軍學者は、みな自流の軍學の優秀を宣傳した。

徳川の御用軍學者は、甲州流の尾畑勘兵衛と、その門人の北條安房守があるが、安房守の門人の山鹿甚五左衛門素行が、すいぶん人氣があつて、大名や旗本、または浪人までも入門した。長直が素行に接近したのは、慶安三年のころ赤穂へ移つてからのことである。素行の日記に

『淺野長直、余の宅に至る』

と、閏十月十四日の條に見える。素行は自ら

『廿五か六の歳のころでしたが、將軍家光公の命で、師の北條安房守が、私に築城の雛形を、木形で作るようにと、いつて來ましたので、作りました。これが家光公のお氣に入り、祖心尼を通して

「御用の内命となりまして、必ず他家へ奉公は無用と申されました」と宣傳した。

長直は、赤穂へ移つてからは

『赤穂には城がない、立派な城がほしい』と、考えもし、良勝や、その弟と相談したであろう。良勝良重も

『それは誠に結構なくわだてでございます』

という人物であつたから、この計畫は進んだが、幕府の法規には

『諸國大名の築城は、修補のためであつても、必ず言上してからでなければいけない。まして、新儀の構營は、堅く停止する』

とあるのだから、これをどうするか問題となる。しかし

『西國の反逆大名の防禦には、姫路があつて、徳川の親類か譜代大名のうちから人選して、姫路城主にする事にはなつてゐる、がもう一つあつていい。このため赤穂にも城を築いてもよい筈』

という點で、内請した長重と、幕府の意見とが一致し、築城許可が得られ、いざ築城となつてから、長直の素行訪問となつたのであろう。もつとも築城計畫は、素行の同門の近藤三郎右衛門がしたが、信頼が出来なかつたようだ。

山鹿甚五左衛門素行は、奥州の會津に生れた。父の六右衛門は、伊勢の者だが、妻のことで人を殺し、會津に隠れた、というのが真相らしい。素行が六歳のとき、江戸に出て町醫を業としたが、はやらない醫者らしく、生活もゆたかでなかつた。

素行は六歳のときから書を読んだといい、九歳のとき、手づるを求めて徳川御用儒學の本家の、林道春の門人になつた。

「師は、無點の論語を、入門のとき私に讀ませたのでしたが、半ばで讀めなくなりました」と、のちに素行はいつてゐる。十五歳のときには『大學』の講義位は出来るようになった。

寛永十三年、素行が十五歳のとき、甲州流の軍學者尾畑勘兵衛・北條安房守に入門したという。廿一歳で、尾畑が兵法の印可を與へられた。

甲州流の軍學は、甲州浪人尾畑勘兵衛の作の『甲陽軍鑑』が教本である。尾畑の作では權威がないところから、高坂彈正の名をかりて、武田信玄の戰術・軍法を作り、山縣昌景の士の山本勘助を軍神としたのである。偽作だということは、一部の人に知られていて、

「川中島の合戦のとき、山縣が勘助を斥候に出したところ、勘助が歸つて來て、山縣に何かいつてゐるのを、信玄がご覧になり、あれは何者だと、お尋ねになりました。山縣は、あれは山本勘助と

申して、三河の者ですが、口才がありますので、私が扶持をやっております。といつた程度の者が勘助で、そんな偉い者ではなう』

と、武田のことを知つてゐる老人が、尾畑のカラクリを非難した。甲州流に對抗して興つた軍學の、越後流は、越後浪人の宇佐美定祐が、上杉謙信の一將の宇佐美定行を、軍神に作つて、山本勘助に對抗させたもの。楠流も同じもので、『太平記』を材料にして作つた。

尾畑は、大坂役の軍學の講釋のはじめで

『秀吉公は、國を治め、民に安心させる道を知らない。ただ攻撃をよるこんで無益の軍を發して遠く朝鮮國を伐つて、無罪の人を殺した。わが士卒を苦しめ、食糧を遠く、千里の外に運んで、我が生民を勞した。ゆえに秀吉公が薨じてから、三年もたゝないのにわが國は亂れ、嗣子の秀頼公はそのあとを保てず、元和の役に歿した。これは、日本のような小國が、朝鮮のような大國を討とうとしたからの罰である。このことから、みな本邦の大小名が、豊家の虐政を悪んで、秀頼公に疎略になつたのである。このため豊臣は政權を保てず、四海ことごとく、東照大神の掌握に歸し奉つたのである』

と、いつてゐる。孫子の燒直しだが、朝鮮の大國は、當時の軍學者の知識を知る好材料である。

軍學者は、その職業がら